1971年4月23日　第三種郵便物認可　2013年1月1日（毎月1日発行）554号　ISSN 0388-4163

障害者の権利を守り、発達を保障するために

全国障害者問題研究会

みんなのねがい

特集　お正月

【特別インタビュー】

伝えたいおせち文化

◉杵島直美（料理研究家）

仲間が届けるおせち／お正月を味わう／全国お雑煮めぐり／お正月の恒例行事

連載　どうして？　教えて！　発達障害の理解

◉奥住秀之（東京学芸大学）

2013
1
No.554

人 Hito to shite として

「障害」というものの正体を見てみたくて

映画『39(サンキュー)窃盗団』を撮った

押田興将さん

ダウン症の青年が主役を演じる映画『39(サンキュー)窃盗団』。発達障害の弟・ヒロシは振り込め詐欺のリーダーに「お前の兄貴は刑法39条（心神喪失者の行為は、罰しない）があるから刑務所に入らなくてもいいんだぞ」とそそのかされ、兄と、幼なじみの和代の３人で泥棒の旅に出ます。

兄・キヨタカを演じたのは８歳下の実弟・清剛(きょたか)さん。素のままの清剛さんを撮ろうと、本人にはほとんどストーリーを伝えずにカメラを回しました。「でもどうやら自分は泥棒の映画を撮っているらしいということはわかっていたみたいです。ドアを開けたら泥棒っぽくあたりをうかがうふりをしたりして彼なりに演じているようでした」

＊

８人きょうだいの長男。清剛さんは下から２番目。自身で「絶対君主のようにふるまっていた」という思春期、「家でも学校でも荒れていた僕とは正反対の存在が清剛だった。誰からも無条件にかわいがられて、うらやましいという気持ちもあったかな」。

高校を中退し、「不幸な未来像しか描けないでいる自分から抜け出すためにとにかく何か一回全力でやってみよう」と飛びこんだのが、故・今村昌平監督が創設した日本映画学校。在学中の３年間、「お前は何者か。人間をどう見るのか」と人間観を問われました。

「どうも僕は人と違って、好き嫌いに関係なく『この人はダメだ』と否定したくない感覚がある。なぜそう考えるのかと思いを巡らせたときの起点の一つは、やはり清剛の存在だった」

「『障害』とは何か。その“正体”みたいなものを見たいと思っていて。15年ほど前、障害者を追ったドキュメンタリーを制作したときにいちばん引きつけられたのが、いわゆる『ボーダー』と呼ばれる人たちでした。普通に話していると違和感はないのに、計算になると突然できなくなる。一度に二つのことを言われると一つもできなくなる。ハンディキャップのわかりやすさで言えば、最もわかりづらいところに置かれている人たちだと思う。僕らがもっと真剣に向き合おうとしなければ、彼らがハッピーになれる環境が生まれない。彼らといい関係をつくるためにも、やはりまずは『知る』ということが重要だと思うんです」

今回の作品ではそんな彼らの生きづらさをシビアにかつコミカルに描きました。「社会には障害者が生きづらい現実がたしかにあってそれは取り除かないといけない。でも障害のある人が不幸だとは単純に決めつけない方がいい。バリバリ働けることだけが幸せだと定義してしまったら、いつか必ず自分も不幸な人になってしまうから」(談)

おしだ　こうすけ　1969年神奈川県生まれ。故・今村昌平監督の助監督を務め、プロデューサーとして『夢売るふたり』（2012）などを手がける。『39窃盗団』は初の劇映画作品。ヒロシ役を演じた押田大さんも実弟で、清剛さんにとってはお兄さん。

『39窃盗団』は12月21日まで川崎市アートセンターで上映中。

公式サイト→http://39thankyou.com/

©2011サンキューキネマ団